

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

平成 28 年 9 月 1 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科

職 名・学 年 博士後期課程2年

氏 名 林 拓 也

|            |  |   |
|------------|--|---|
| 助 成 の 種 類  | 平成27年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 在外研究長期助成  |   |
| 研 究 課 題 名  | ライブニッツ哲学における個と世界   |   |
| 受 入 機 関    | パリ第一大学(パンテオン・ソルボンヌ)  |   |
| 渡 航 期 間    | 平成 27 年 9 月 1 日 ～ 平成 28 年 8 月 31 日   |   |
| 成 果 の 概 要  | タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無     |   |
| 会 計 報 告    | 交付を受けた助成金額   | 3,000,000円  |
|            | 使用した助成金額   | 3,000,000円  |
|            | 返納すべき助成金額  | 0円  |
|            | 助成金の使途内訳   | 滞在費 3,000,000円<br>-----<br>-----<br>-----<br>-----<br>-----<br>-----<br>----- |
| 当財団の助成について | (今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)<br>助成金を一括で振り込んでいただいたおかげで、様々な手続きがスムーズに済みました。 |   |

報告者は平成 27 年度の在外研究長期助成を受けて、2015 年 9 月から 2016 年 8 月までパリ第一大学パンテオン・ソルボンヌにて研究を行った。

報告者は 17 世紀から 18 世紀にかけて多方面で活躍した哲学者ライプニッツの形而上学思想を研究している。ライプニッツは理由のないものは何もないという命題を原理として掲げ合理的な世界理解を目指すと同時に、神と人間の意志の自由と相容れないような絶対的必然主義に対抗した哲学者である。従来はデカルトやスピノザといったビッグネームとライプニッツとの関係を扱う研究が多かったが、近年ではこれまで見過ごされていた近世のスコラ哲学者の思想がだんだんと明らかにされつつある。こうした状況を受けて、報告者の博士論文における主要な課題は、ライプニッツがスコラ形而上学に対してどのような態度決定をし、自らの形而上学思想を形成したのかを初期から発展史的に再構成することである。報告者が取り組んでいるのは、形而上学で論じられる個々のテーマだけではなく、形而上学という学問がどのような学問として構想されているのか、という問いである。

報告者は、ソルボンヌの図書館、フランスの国立図書館の他、スペインとドイツの図書館においても一次文献・二次文献の収集を行った。とくに電子媒体での論文は日本におけるよりも入手が容易で、研究テーマに関する文献を多く集めることができた。入手の難しいものについては直接著者に依頼し送っていただくということもあった。これらの文献の読解等を通じてまず明らかになったのは、スアレスのような有名な近世スコラの哲学者も、当時のスコラの形而上学の中の一立場にすぎないということである。そこで報告者は一部の主要なスコラ哲学者を特権視することなく、ライプニッツが実際に読んだ、あるいは読んだと推測されるスコラ哲学者とライプニッツとの関係を歴史的な仕方で調査した。

パリでの研究の成果の一部についてはつぎの二つの学会発表において公表した。

1) 2016 年 3 月に開催されたフランス語圏ライプニッツ研究協会大会において「*La double liberté divine chez Leibniz*」（「ライプニッツにおける神の二重の自由」）と題する発表を行った。当発表は、「栄光」という概念を軸にテキストを読解することによって、知性の判断が意志をある選択へと強制するとして自由の余地を否定する解釈を退けるとともに、「無ではなく何かを造る」という観点と「他ではなくこれを造る」という観点とがどのように関係しているかを明らかにすることによって、ライプニッツの世界創造論および神の自由の特質を明確にしたものである。

2) 2016年7月にはハノーファーで開催されたライプニッツ国際会議において、「Le statut ontologique des possibles chez Leibniz」(「ライプニッツにおける可能的なものの存在論的身分」)というテーマで発表した。可能なものは矛盾を含まないものと論理的には定義されるが、実際には生じないけれども、生じることが可能であるような出来事は何らかの意味で存在すると言えるか、あるいは何らかのリアリティを有すると言えるかどうか。もし言えるならばそれはどのようなリアリティであり、そのリアリティは何に基づくか。また単に可能的なものは実際に生起するこの現実世界といかなる関係を持つか。当発表では、デカルトやスコラ哲学者たちの見解と比較しながら、こうした問いに対するライプニッツの見解を明らかにしつつ、可能性理論の変遷が自由論のみならず形而上学のプロジェクトの展開を規定していることを示唆した。

パリはライプニッツ研究者が多いことに加えて、世界中からライプニッツ研究者が集まる素晴らしい環境であった。今回は単位の取得を必要としない研究者としての身分での滞在であったため、所属するパリ第一大学の授業はもちろん、他大学、パリ高等師範学校などでの授業、講演を自由に聴講することができ、ライプニッツ哲学についての見識を深めるとともに研究者や学生と意見を交換することができた。リヨンとハノーファーでの学会発表の際にはとりわけフランス語圏の研究者だけでなく、英語圏、スペイン語圏、ドイツ語圏といった多様な研究者からコメントをいただくことができ、今後海外で活動していく人脈を作ることができた。フランスのライプニッツ研究の状況については京都大学文学研究科西洋近世哲学史研究室紀要『PROLEGOMENA』次号にて報告する予定である。

最後になりますが、これらの活動は京都大学教育研究振興財団の助成により可能になったものであり、多大なご支援に対して深く感謝を申し上げます。